

参加者の声

イベントには10代から60代まで、約40名の方が参加。トークを聞き終え、「やってみたいと思ったこと」「感じたこと」を伺いました。

- ▲ 印象的だったのは、「関わりしろ」のつくりかた。ケアをする／されるという関係性にとらわれず、「回路」がひらかれている、回路になっている活動に魅力を感じました。(30代 大学教員・ミュージアム教育関係)
- ▲ 私は助産師として地域に根付いた医療をしたいと考えているので、今回とてもいいお話が聞けたと思いました。(10代 学生)
- ▲ 孫さんのように本職の肩書にとらわれず、自分の興味を探求し、人や社会に貢献していくことを私もトライしたいと思いました。(30代 東京都在住)
- ▲ アートというとまだハードルが高いなという感じです。アートをツールとしてオープンな場づくりをすることで、生きやすさの回路をつくれるように思います。(40代 東京都在住)
- ▲ “アイデアを実現してみる”ことそのものがアートのように感じました。その意味ではアートは日々、様々な単位、場所でおきているのではないかと感じました。(30代 看護師)
- ▲ 位相をずらすと見えてくるものがある。そんな印象です。(60代 会社員)
- ▲ 活動に参加してみたい。よそ者が一定の参加しにくさを超えるための方法は？(30代 会社員)
- ▲ 孫さんの「ずれる」という言葉がとても良くて、しっくりきました。自分の仕事のクライアントさんは地域のご近所さんでもあるので、自分からとんとんずれていこうと思いました。(40代 精神障害の就労支援員)
- ▲ 最後に孫さんが「小さいコミュニティを大切にしたい」と言われていたのが残りました。最近はSNSなどで「主語の大きい語り」が多いと感じていたので。(40代 会社員)
- ▲ 何度か参加させてもらって、当初の“アートって？”という不思議な問いは(いい意味で)どーでもよくなってきました。慣れてきた、みたいな感じかも。(50代 東京都在住)

東京アートポイント計画は、アートを入口に、プロジェクトの道のりをともに歩んだ人々の「生きやすさ」を広げてきた。実践を介して創造的な「術」を獲得する。時間をかけて「強弱のあるネットワーク」を育む。それは生き方の選択肢を増やすだろう。私たちの経験を孫さんに伝えるため、言葉をひねり出した。医療とアート。話は分野を確かめ、深めることから始まったが、話すほどに出口は同じなのだと思った。専門家が処方するのではない。さまざまな人が連携することで、ともに処方をつくっていく。孫さんが語った「文化的処方」の「つくりかた」に深く納得した。使い慣れない言葉が増えた回だった。それは次の「対話」の糸口になるだろう。

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー
佐藤 李青

聞き手のノート

「生きやすさの回路をひらく」ことは、一人でもできることがあるだろう。でも、誰かとともにひらかれた「回路」の方がきっとしなやかで寛容だ、と孫さんと語り合うなかで強く思えた。孫さんの職業である「家庭医」とは、病状だけでなく、その人が抱える人間関係をも診るのだという。主観と客観の間で揺らぎながら「対話」を重ね、治療方針を探るそのまなざしと振る舞いは、土地やそこで生きる人の暮らしの文脈に触れようと対話を重ねるアートプロジェクトの姿に近い。「対話」は共感や共鳴を呼び起こすだけでなく、他者との距離を鮮明にする。自らの立ち位置を知り、他者との圧倒的な距離を実感できたとき、未知の「回路」はひらけるのかもしれない。

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー
嘉原 妙



東京アートポイント計画



Report 02
孫大輔

[お知らせ] 書籍を販売中です!

東京アートポイント計画/Tokyo Art Research Labから生まれた本をウェブや書店でお買い求めいただけます。PDF版は無償で公開中。詳しい情報はそれぞれのQRコードからご覧ください。



『これからの文化を「10年単位」で語るために -東京アートポイント計画 2009-2018-』



『[新装改訂版] 東南アジアリサーチ紀行-東南アジア9カ国・83カ所のアートスペースを巡る』



Facebook icon

そのほか最新情報はFacebookで更新中!

東京アートポイント計画

“「健康」にとって、地域における社会的なつながりが大切な意味を持つことがわかってきたんです”

トークイベント「Artpoint Meeting #09 -生きやすさの回路をひらく-」にて、孫大輔さんのお話を伺いました。

PROFILE 孫大輔（家庭医、谷根千まちばの健康プロジェクト「まちけん」代表）

2000年東京大学医学部卒。腎臓内科、総合診療（家庭医療）を専門として勤務を続けた後、2012年より現職。大学では主に医療コミュニケーション教育に従事。現在教育・研究とともに、家庭医としての診療も続けている。2010年より市民・患者と医療者がフラットに話せる場「みんくるカフェ」を主宰。2016年より「谷根千まちばの健康プロジェクト（まちけん）」というコミュニティプロジェクトを開始。主な著書「対話する医療：人間全体を診て癒すために」（さくら舎）。2019年、短編映画「下街ろまん」を製作。

▲ 「社会的処方」という考え方

佐藤：東京アートポイント計画は、2019年に10周年を迎えました。その節目に自分たちの活動を振り返ると、東京アートポイント計画とは、関わる人たちの生きやすさをひらくような取り組みではなかったかと感じたんですね。たとえばここでは、市民がアーティストと関わることによって、生き方を広げる創造的な「術（すべ）」に出会う可能性がある。また、活動で育まれる多様なコミュニティは、強弱を含んだネットワークとして普段の生活の豊かさにも活かされるものです。この「生きやすさ」というキーワードは、孫さんの「谷根千まちばの健康プロジェクト（まちけん）」にも通じると思い、お話を聞きたいと考えました。

孫：「まちけん」は、僕が医療従事者の仲間たちと一緒に、谷中・根津・千駄木エリア（谷根千）で2016年に始めたプロジェクトです。普段は病院に勤めている自分が、なぜまちに飛び出したのかと言うと、人の「健康」にとって、住んでいる地域における社会的なつながりが大切な意味を持つことがわかってきたんです。

たとえば、いまイギリスでは「社会的処方」という考え方が広がっています。これは医者が診断時に社会活動の場を紹介するもので、背景には、「孤独でいることはタバコよりも身体に悪い」といった認識があります。「ソーシャルキャピタル」と呼ばれる地域の緩やかなつながりが、健康に関わるのがわかってきたんですね。「まちけん」には、谷根千で人がどんな場所に集まり、交流しているのか、そして、それが身体だけではなく心も含む健康＝「ウェルビーイング」なあり方にどう関わるのかを調べる目的があります。

ただ、これは表の理由で、裏側には単純に自分が谷根千好きなこともあります（笑）。実際に調べてみると、江戸のDNAが残る谷根千では、路地や銭湯、古民家や寺院といった場所において、人々の多様なコミュニケーションが生まれていることがわかりました。

まちへの入り方としては、最初、まちでコーヒーを配って回る「モバイル屋台 de 健康カフェ」という活動をしました。自然に住民と関わり、その方たちの健康に対する意識を観察したわけです。この活動は現在全国5カ所に広がっています。また、そこで縁のできた方たちと、

「まちけんシネマ」と称して自主映画を制作したり、対話を通じて病や心配事を緩和する「オープンダイアログ」や、個人の物語を即興劇にする「プレイバックシアター」という活動をしたりしています。また「まちけん落語部」では、自分たちで落語も演じています。

▲ 健康にとって、文化とは？

佐藤：「まちけん」では文化活動がさかんですよ。なぜ、文化を重視するのでしょうか？

孫：医療従事者には現在も文化に対して距離感があるんです。演劇などしていると、関係者からは「時間があっていいね」と言われてしまう。従来、医療とアートの関わりという精神科が中心で、それ以外の領域ではあまり馴染みがなかったんですね。でも、糖尿病や認知症のような慢性疾患が中心になった現在では、治療が病院では完結せず、地域に戻ったあとのケアも大事になる。また、ストレスが高い人ほど血糖値が上がり、糖尿病のリスクが高くなるという風に、身体と精神の問題はじつは切り離せないものです。

そのときに、文化の側面が重要になるのです。自分たちは、ウェルビーイングに働きかける取り組みをする際、演劇や落語やアートなど、地域文化を活用したアプローチをしたいと考えていて、それを社会的処方と比較して「文化的処方」と呼んでいます。

佐藤：「まちけん」は医療活動として認知されているのですか？

孫：「相当変わったことをやっている」とは、いつも言われますね。そもそも、モバイル屋台もとりあえずやってみたという感じで、明確な目的はあまりなかった。医療活動は明確な目的を求められることが多いので、その意味ではアウトローな活動でした。

古い言葉で言えば、「ヘルスプロモーション」という概念でその活動を捉えることもできます。これは専門家が知識のない人に知識を与え、健康の維持や促進を目指すものです。ただ、現在では多くの人のリテラシーが上がり、また、病気がない＝健康というわけでもなくて、人間関係などトータルな意味での健康を上げていく傾向があります。その意味では「まちけん」は医療に入りますが、現状では実験的にやっているという段階ですね。

▲ 「生きづらさ」から開放される自由

佐藤：「生きづらさ」と「生きやすさ」というと、前者の方が見定めやすいのかなという印象もあります。「健康」とは、測ることができるものですか？

孫：一応、研究的にはいろんなツールがあります。ウェルビーイングを測定するツールも世界的には開発されていて、有名なのは「PERMA理論」（ポジティブ感情、エンゲージメント、関係性、意味・意義、達成の五つの指標による測定法）です。とは言え、これは多分に主観的なものでもあるんですね。そもそも、「生きづらさ」「生きやすさ」というのは日本語に特有の表現でもあって、なかなか英語には訳しにくい側面があるんです。

僕が「生きづらさ」で思うのは、日本社会の同調圧力の強さについてです。そこから解放されるという自由があると思う。そのなかで、表現活動には大きな可能性があります。

さきほど話した映画の制作にあたり、技術も知識もなかったので、一年間、映画学校に通いました。そこで、上司にパワハラを受けて、最後は上司にたて突く《踊れない男》という映画をつくった。これはほとんど自分のことで、作品を通して自分の考えを伝えられることは僕自身にとってのウェルビーイングにもつながっていると思います。

その後、具体的に谷根千で映画をつくるなかでは、飲み屋で知り合った映画プロデューサーや役者の方が参加してくれるなど、いろんな偶然の出会いがありました。そこから、ある鬱の青年が人との出会いを通じて回復していく映画作品《下街ろまん》が生まれました。

▲ 「対話」と「アート」の近似点

嘉原：アートプロジェクトをやっているのは、表現にとって不確定要素が入り込むことが大事だということです。アーティストは、その種を現場に持ち込んでくれる存在でもある。お話を聞くと、孫さん自身が地域でそうした役割を果たしている気がします。

佐藤：アーティストという、以前はモノをつくる人のイメージが強かったですが、現在はコトを起していくアーティスト像というのも広く認められるようになってきました。

孫：僕は活動のなかで「対話」を重視してきました。「会話」は話し終わっ

たあとにお互いが変わらなくても良いけれど、「対話」は変わる。そこには終着点が見えない面白さと怖さがあって、たしかにそれはアートとも近いのかもしれませんが。従来、医療従事者は準公務員的で、目的がない活動をしてはいけないと思われがちだった。でも、そのプロセスこそを大事にするのがアートであるなら、自分の活動と共通性を感じます。

嘉原：「まちけん」の活動を通して変わったのは自分だというお話がありました。孫さんは近く鳥取に移住されるそうですね。なぜでしょうか？

孫：僕は地域での実践活動に興味があるんです。論文にはしにくい、そうしたプロセスを含んだ活動をしていきたいという思いが年々高まってきています。

また、権威主義的な病院の世界から離れたいということもある。現在の勤務先でひたすらに出来上がったルートを歩むのか、暮らしと仕事を一体化するなかたちで物事に取り組んでいくのか、ここ最近、ずっと考えてきました。そんななか、以前から縁があって3カ月に一度ほど訪れていた鳥取や鳥根で働くという選択肢に至りました。

佐藤：「まちけん」の活動の今後は？

孫：まだわからないですが、いま、引き継ぎ作業をしていて、落語やオープンダイアログなどは続けてくれる人が出てくれました。僕も、今後も出来る限り関わっていきたくです。

いっぽう、新しく移る鳥取では、「何かを始めることありき」で動くのではなくて、まずはじっくりと地域のことを知っていきたくと思っています。そのなかで、また自分が「まちけん」の経験を活かしてできることがあれば、ぜひやっていきたいですね。（後篇へつづく）

主催 | 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
聞き手 | 佐藤李青（アーツカウンシル東京）、嘉原妙（アーツカウンシル東京）
収録 | 2020年2月9日、TOT STUDIOにて レポート構成 | 杉原環樹（ライター）



レポート後篇はウェブサイトからご覧いただけます
<https://www.artsCouncil-tokyo.jp/ja/blog/41939/>

